

## <エッセイ>

### アイドルの「その先」に、誰が責任を持つのか Who Bears Responsibility for the "Afterlife" of Idols?

橋本ゆき\*, 安藤リチャード正寛†

Yuki Hashimoto, Masahiro Richard Ando

「アイドルを卒業した人は、その後をどう生きていくのか？」折に触れて語られる問いですが、最終的には個々の事例が取り上げられるに留まり、問いだけが繰り返されてきました。もちろん、その後をどう生きるかに本人の努力が関わることは事実です。ただ、当事者として、そして支援者として見えてきたのは、この問題が長らく「個人の努力」の話としてのみ語られ、「責任の所在」という視点が置き去りにされてきた、ということでした。

#### I. ネバーランドと、外の世界

私は17歳で「東大受験生アイドル」としてデビューし、東京大学に通いながらも9年間、ステージに立ち続けました。昼は大学、夕方からは劇場、土日は3~4公演、ハイエース1台で全国へ。目の前のライブに集中し続ける日々には、「この先」を考える時間も情報もありません。外の世界から切り離されたネバーランドのような場所で、ここで売れなければ人生は終わりだと、本気で思っていました。

卒業後、メンバーの事故をきっかけに政治の道を志し、2019年、渋谷区議会議員に初当選しました。そこで驚いたことは、アイドル時代のスキルが非常に役立ったことです。人前に立つ度胸も、初対面の人と関係を築く力も、アイドル活動で鍛えられていました。正直、アイドル時代は「人気」という物差しの上で思うように評価されず、自分に自信が全くありませんでした。しかし、別の世界に出て初めて、自分の経験が武器になることに気づきました。自分の強みは、世界を広げないと見えてこない。私はこの時に知りました。

#### II. 機会が、ないというリアル

一方で、卒業した仲間の中には、次の一步に悩む人が少なくありませんでした。私よりずっと人気も人望もあった仲間が立ち止まる姿は、悔しいものでした。彼女たちに足りないのは能力ではなく、外の世界と出会う「機会」だ。自分にできることは何かと考え、元アイドルをはじめとする挑戦者のセカンドキャリアを支援する会社を立ち上げました。

まだまだ道半ばではありますが、向き合った相談者は100人を超え、当初は採用に慎重だった企業からも「ああいう人材が欲しい」と問い合わせをいただくことも増えました。

---

\* 渋谷区議会議員／株式会社ツギステ創業者

† 株式会社ツギステ代表

### Ⅲ. 誰の仕事でもなかった、セカンドキャリア支援

なぜこの支援は、これまで存在しなかったのでしょうか。現場に立って見えてきたのは、ここが構造的な「空白地帯」だということです。

そもそも、多くのアイドルは、個人事業主として事務所と契約して活動しています。会社員であれば、雇用関係の中にスキルの育成やキャリア形成の支援が組み込まれていますが、アイドルと事務所は、本来対等な事業者同士であり、育成を受ける場所ではありません。事務所の役割はマネジメントとプロデュース、すなわち所属する本人をいま最高の形で輝かせることであり、「その先」のキャリアまで担う立場にはないのです。実際には指揮系統や力関係の偏りがあるとしても、契約の建て付けとしてはそうになっています。

一方、一般的なキャリア支援組織の役割は、経歴やスキルを条件として、企業と人を結ぶことです。就職や転職の仕組みは「標準的な経歴」を前提に設計されているため、職務経歴書に書ける経験を持たないまま次の世界へ向かう人は、その仕組みに乗ること自体が難しい。それぞれが自分の役割を誠実に果たしているにもかかわらず、その仕組みの中ではスタートラインにすら立てないのです。

その人自身の現状分析や経験の言語化、企業で働くためのマインドセット、その先の伴走までを共にする。この役割は、どの持ち場にも含まれてきませんでした。

加えてこの領域は、芸能というブラックボックス化されがちな世界であるため、関わったことのない人にとっては業界の前提理解が難しい。さらに特殊な個別ケースゆえに支援のコストがかかる一方、ビジネスとしての収益性が見えにくい。つまり、事業として積極的に担う理由を持ちにくい場所でもあります。この空白は、芸能事務所や転職支援等の民間サービスなど、それぞれの役割分担の帰結として、残り続けてきたものです。そして、その空白の中で苦しむことは、「自己責任」であるかのように扱われてきました。

知らないから、不安になる。不安だから、動けない。動けないまま時間が経つほど、外の世界はさらに遠くなる。空白に落ちた人は、この循環から一人で抜け出すことを求められてきました。実際、支援の現場で実施されている適性検査の結果を分析すると、セカンドキャリアへ移行できた人とそうでない人を分けていたのは、学力等ではなく、悲観や不安といった「心の状態」でした。これは、支えがあれば変わるものです。伴走者がいるかどうかで、同じ力を持つ人の人生が分かれてしまうという現状があります。

### Ⅳ. 一歩ずつ変えていくために

この出口の問題は、卒業した人だけの話ではありません。かつては「芸能は特殊な世界だから」という割り切りを、時代がどこかで許していました。しかし、業界の健全化が問われている昨今、その前提のままではいられないはずです。出口の見えない世界に、人は安心して飛び込めない。「卒業しても、その先がある」が当たり前になってはじめて、いま活動している方々は、目の前のステージに全力を注げる。そうして、アイドルというカルチャーは、これからも人を惹きつけ続けられるものになるのではないのでしょうか。

この空白を埋める責任は、本来、誰か一人のものではありません。それは特定の主体の非を責めるものではなく、カルチャーを支えるエコシステム全体の課題として捉え直されるべきものです。本人にも、事務所にも、業界にも、そして社会の側にも、それぞれに担える一端があるはずです。ただ、誰かが最初に動かなければ、空白は空白のまま残ります。全力の挑戦が、人生の重荷ではなく土台になる社会は、「やり直しがしづらい」という社会課題を解く一つのピースにもなるはずです。

かつて「どうしたらいいかわからない」と相談に来てくれた元アイドルから、先日、声が届きました。「就職してよかったです。結婚して、いまは安定して働いています。」この、一見どこにでもある「ありふれた日常の幸福」の獲得こそが、本来すべての挑戦者に担保されるべきセーフティネットの形ではないでしょうか。

筆者らが創業したキャリア支援会社であるツギステの理念は、「ラストステージより、輝く日常を。」である。

アイドルの「その先」の空白をなくすためには？その問いに業界全体で向き合うことが当たり前になる日まで、私たちも歩みを止めずに取り組んでまいります。

